

事業実施報告

COC+事業啓発イベント「学生向けキックオフ」の実施と 参加者アンケートから見る学生の意識の分析

1. 事業趣旨

県内大学等及び企業・行政との実質的かつ機動的な連携協働体制の下で、大分を創る人材を育成する教育の充実と、COC+大学等が、より高度な地域創生教育のカリキュラムを新規に構築・実施することにより、「汎用力」と地域志向の態度を養成し、地域課題を解決し地域創生の牽引者として活躍できる人材の育成を目指すことを目的とした本事業を実施するにあたり、本事業の目的や履修する意味をより広く学生へ周知するために学生向けのキックオフイベントを実施した。2日間の実施で経済・教育・工学・福祉の学生、257名が参加した。今回学生へわかりやすくCOC+の特徴を伝えるため、イメージビデオを作成。協力企業の方々に「COC+事業に参加して一緒に大分を創っていこう」というメッセージを伝えてもらい、大学等・企業・地域が一体となって大分を担う人材を育成するイメージを学生に啓発することを目的に実施した。

また、参加学生へアンケートを実施。今後の具体的な取組に活かせるように学生のニーズを把握し、具体的施策へ発展させていく。

2. 開催日時：4月7日・8日：12：20～12：45

8日：11：30～11：55 合計3回

3. 会場・学生参加者数： 大分大学第2大講堂 アンケート回収数：257

4. 「キックオフ」プログラム

(1) COC+が目指すイメージビデオ上映「これがCOC+事業だ！」

企業関係者からのメッセージ、大分を創る人材を育成するという授業のイメージ等を2分間のビデオで編集して上映

(2) 挨拶 教育担当理事（COC+推進機構長） 越智義道

COC+事業の意義や目的を2分間で紹介

(3) 大分を創る教育プログラムの説明 特任教授 中川忠宣

COC+事業の目的と教育プログラムの概要、「大分を創る」科目のシラバス・履修の方法・履修のメリット等についてプレゼンで説明

(4) 参加者へのアンケート調査（調査項目：参考資料参照）

5. 学内イントラによる全学生への広報

- ・大学等による「おおいた創生」推進協議会のホームページにキックオフの映像を掲載して、全ての学生への啓発を行っている。

6. 参加者アンケートから見る学生の「大分を創る人材の育成」の観点からの意識

キックオフを3回実施して257のアンケートを回収した。未記入等の項目があったため、データとしての有効数は項目により若干の差があるので、それぞれのグラフの「N=〇〇」で示している。なお、考察では、「参加者は意識が高い」という前提に立つて行うこととするが、初めての試みでもあることから、データをそのまま分析することとした。また、且野原キャンパスでの実施のため、医学部の調査が出来なかったのを含めていない。

(1) 基礎的データ

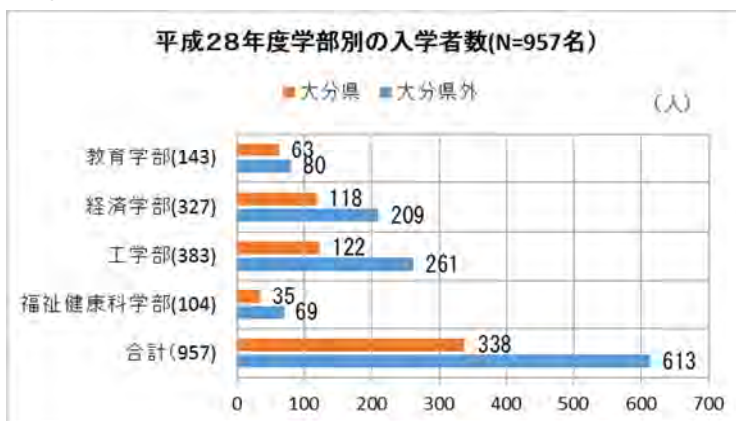
1) 入学者数

図1は平成28年度の入学者数を示したものである。

学部別に見ると経済学部、工学部、福祉健康科学部では大分県出身者が約半数である。しかし、教育学部では大分県出身者が44.1%と多くなっている。大分県出身者は全体の35.3%で大分県外に比べて約半数である。

平成26年度卒業生の大分県内就職率(42.3%)と関係づけてみると県外出身者も大分県内に就職していることがわかる。

図1



2) キックオフ参加者数

図2はキックオフ参加者の男女の割合を示したものである。

図3は学部別の入学者数と参加者数の比較を示したものである。

経済学部が41.9%(137名)と最も多く、教育学部が30.8%(44名)、工学部が14.9%(57名)、福祉健康科学部が12.5%(12名)となっている。全体では22.4%(214名)の1年生が参加したことになる。

以下、この参加者の割合を前提として分析することとする。

図2

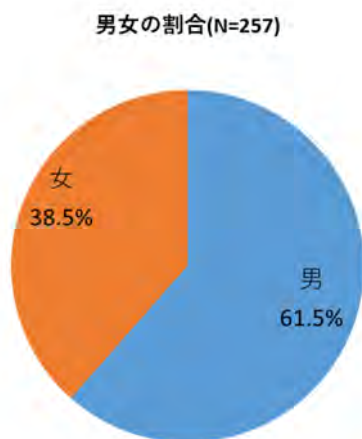


図3

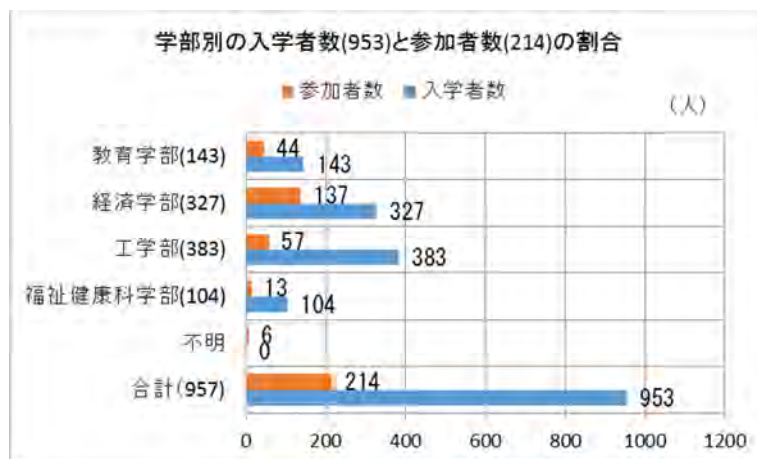
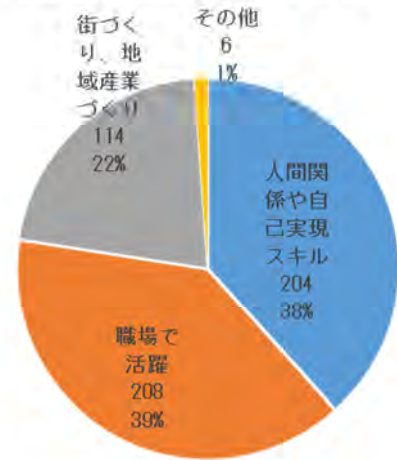


図4は大学の学びでつけたい力を複数回答で求めたものの割合を示している。

「汎用力」（人間関係や自己実現スキル）は38%、「企業力」（職場でつける力）が39%で、「地域力」（街づくり・地域産業づくり）が22%で若干少なくなっている。（※以下、「汎用力」、「企業力」、「地域力」を前述の意味で記述する。）このことは、他の項目と比べて「地域力」がイメージできていないのではないかと推測される。

図4

大学で付けたい力(複数回答N=526)



(2) 学部、学年からの分析

1) 学部ごとの分析

図5はキックオフシンポジウムの参加者を学部ごとの割合を示したものであり経済学部が53.3%と半数以上である。次いで工学部（22.2%）、教育学部（17.1%）の順になっている。

図6は「大学の学びで付けたい力」（複数回答）を学部別に示したものである。特徴として、教育学部は「汎用力」が45.6%と他の学部と比較して多くなっている。福祉健康科学部は「地域力」が他の学部と比べて31.3%と多くなっている。工学部では「企業力」が43.9%と他の学部と比べて多くなっている。このことから学部の特性がうかがえそうである。

図5

学部ごとの参加者(N=257)

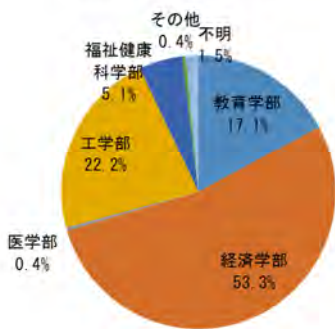


図6

大学で付けたい力(複数回答N=518)

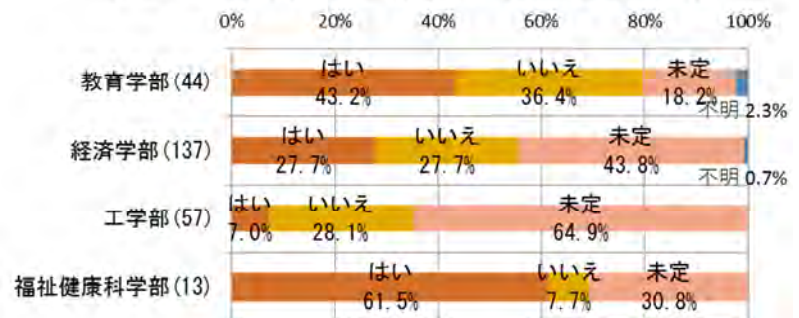


1) ①1年生・2年生の意識

図7は1年生・2年生の大分県内就職希望者（251人）を学部別に示したものである。大分県内就職希望者の割合が多いのは教育学部（43.2%）で他の学部より多い。また、「未定」は工学部（64.9%）が多く、次いで経済学部（43.8%）となっている。このことから工学部及び経済学部

図7

1年生・2年生の学部ごとの大分県内就職希望者(N=251)



の就職希望地未定の学生の学びが県内就職率向上へのカギとなることから、入学当初から大分県内就職希望が無い学生や未定の学生への、大分の魅力を伝える教育プログラムの開発も必要であると考えられる。

図8は大学の学びで付けたい力(複数回答)を学部別に示したものである。

この図から見ると参加者全員の傾向とほぼ同様であるが、特徴として、教育学部は「汎用力」が他の学部と比較して多くなっている。福祉健康科学部は「地域力」が他の学部比べて多く、工学部では「企業力」が他の学部比べて多くなっている。

図9は「興味ある授業形式」(複数回答)を学部別に示したものである。

特徴としては工学部では「大学教員による講義」(32.5%)が他の学部比べて多い。教育学部では「地域や企業による講義」(12.8%)が他の学部比べて少なくなっている。また、福祉健康科学部では「グループワーク」(15.1%)が他の学部比べて少なくなっている。「職場や地域での体験」については各学部ともほぼ同じ割合になっている。

このことから各学部の特色がうかがえるものもあるが、特に学部によって留意する必要がないと考えられる。

2) 学年ごと分析

図10はキックオフ参加者を学年別に示したものである。

1年生は各学部での入学ガイダンスにおいて説明(紹介)をしているために多くなっているが、医学部を除く新1年生の22.5%にとどまっている。

図11は大分県内就職希望の有無を学年別に示したものであり、1年生と2年生の傾向は後述する。

図10

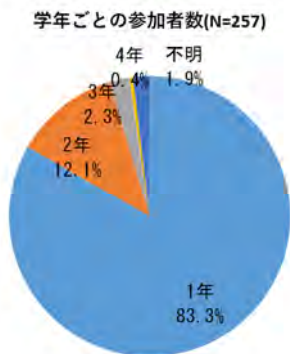


図8

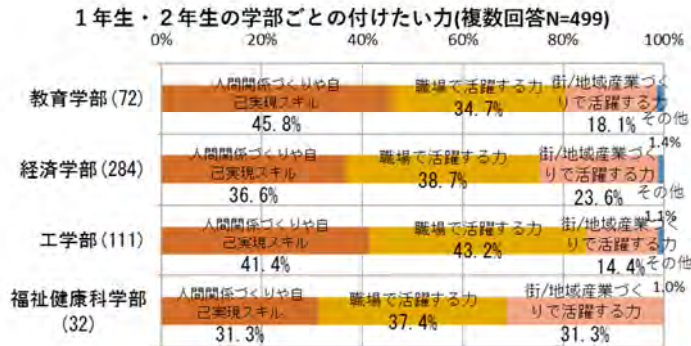


図9

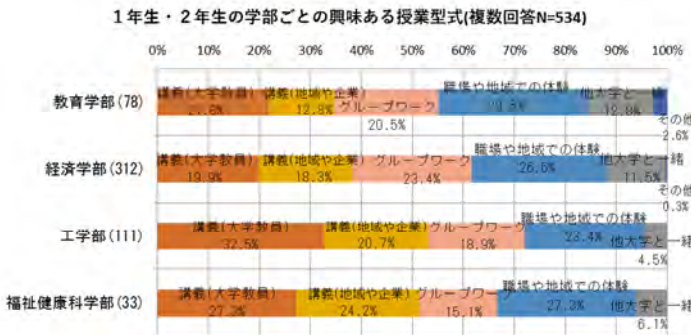


図11

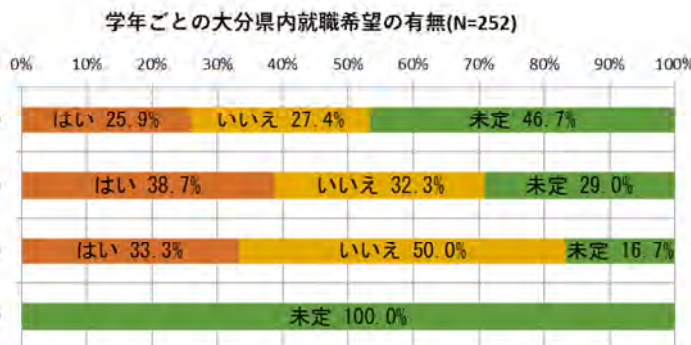
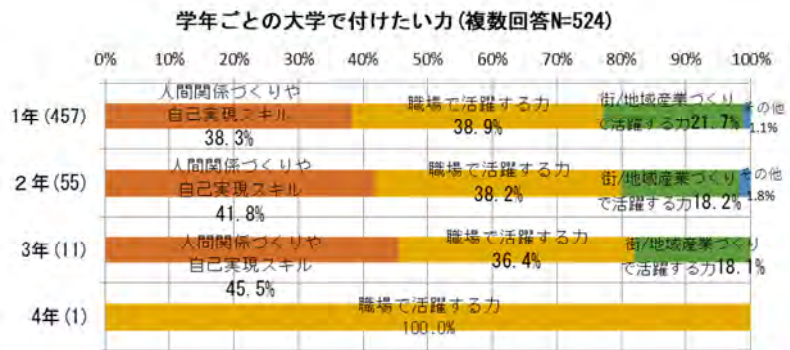


図12は「大学の学びでつけたい力」(複数回答)を学年別に示したものである。1年生では「汎用力」、「企業力」、「地域力」がほぼ同じ割合であるのに対し、「汎用力」においては2年生、3年生と徐々に割合が高くなっている。ただし、3年生についてはデータ数が少ないためこの割合をそのまま考察できないと考えている。

図12



2) -①1年生・2年生の意識

図13は、図11で示した内、大分県内就職希望の有無を1年生、2年生別に示したものである。

図13

この図からは入学当初は「未定」(46.7%)が半数近くであるが2年生になると未定が減少し県内就職希望が38.7%と多くなっている。ただし、2年生のデータ数は31と少ないため2年生全体の傾向を示しているかどうかは判断できない。

1年生・2年生ごとの大分県内就職希望者(N=245)

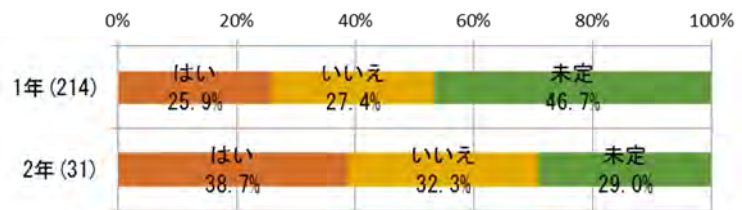
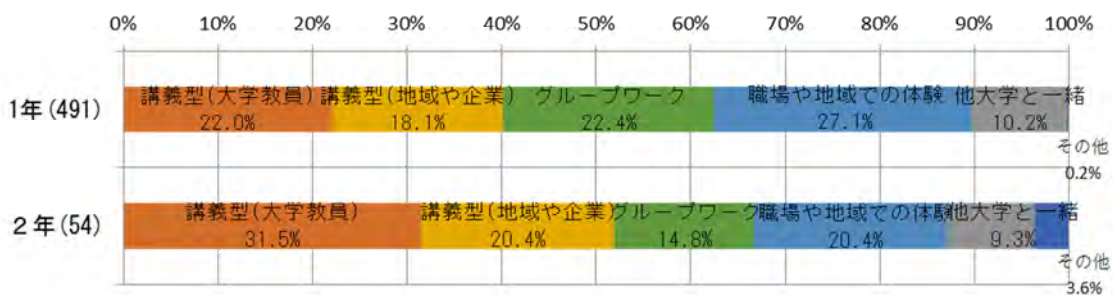


図14は「興味ある授業形式」(複数回答)を1年生、2年生別に示したものである。

1年生では2年生と比較して「グループワーク」(22.4%)、「職場や地域での体験」(27.1%)が多くなっている。1年生の中においても「職場や地域での体験」が最も多い。それに比べて2年生では「大学教員による講義型」(31.5%)が多く、このことは2年生の他の項目に比べても、最も多くなっている。2年生のデータ数が54と少ないために単純に比較はできないが、1年生は、指導要領の改訂によって平成27年度から高等学校が本格的に実施している職場体験等のアクティブ・ラーニング等の授業形式を体験したことによる可能性が考えられる。このことから、単に講義による授業を行うだけでなく、こうした学生の求めに応じたカリキュラムの実施や大学生活での学びの場を設定する必要があると見えてくる。

1年生・2年生ごとの興味ある授業型式(複数回答N=545)

図14



3) 出身地と大分県内への就職希望の有無

図15はキックオフへの参加者の内、出身地のエリア別の割合を示したものである。

大分県が38.5%で1/3強、大分県を除く九州エリアも40.5%で1/3以上である。

図16は参加者全体の、大分県内就職希望の有無の割合を示したものである。大分県内就職希望者は27.6%と少なく、県内への就職希望をしていない学生も28.0%であり、未定が43.6%と半数近いことがわかる。

なお、大分県出身者の就職希望等に関する考察は後述する。

図15

図16

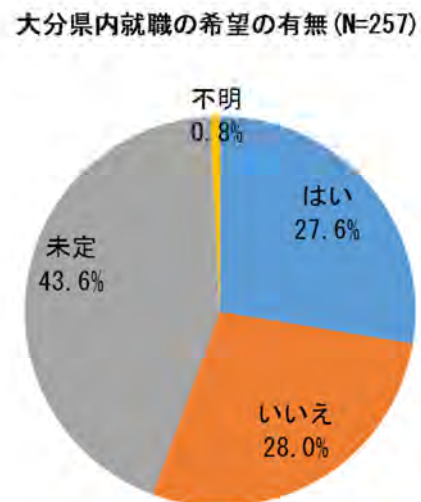
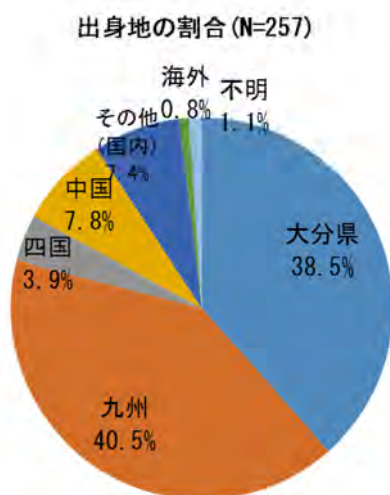
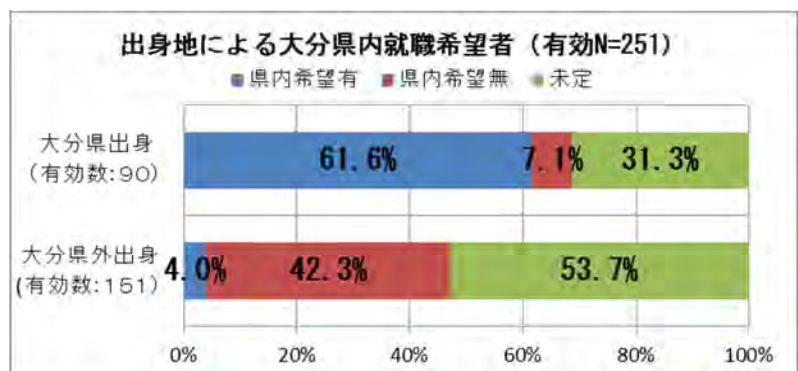


図17は大分県就職希望の有無を県内出身者と県外出身者に分けて示したものである。

大分県出身者は61.6%が県内就職を希望しているのに対し、大分県外出身者は4.0%しかない。

また、未定は大分県出身者では31.3%、大分県外出身者では53.7%と高い割合を示している。

図17



このことからCOC+事業の地域創生の若者を育成し、地域で活躍するという目的を達成するためには、大分県出身者の入学促進と、就職希望先が未定の学生への大分を創る人材を育成する学びの提供、さらには、雇用先の拡大が重要であるということが見えてくる。

4) 1年生・2年生の大分県内就職希望の有無と各項目の関係

1年生・2年生で大分県内就職希望者はわずか27.6% (67名) であり、希望無と未定と不明を合わせた割合は72.4% (178名) になっている。しかし、平成26年度卒業生の県内就職者実績の割合である42.3%から見ると、単純には比較できないが、入学当初の「未定」が、実際は県内に就職していることが推測できる。以下、大分県内就職希望の有無に関する他の項目との関係を見ること

とする。

4) -①大分県内就職希望の有無と各項目の関係

図18は「大学の学びで付けた力」(複数回答)を大分県内就職希望の有無および「未定」別に示したものである。

大分県内就職希望者は「地域力」(27.4%)が県内就職希望無と未定に比べて高くなっている。大分県内就職希望無は「企業力」(44.3%)が県内就職希望有と未定に比べて高くなっている。

図19は大分県内就職希望者67名の「大学の学びで付けた力」を項目毎にその割合を示したものである。1番多い「汎用力」は67名中82%(55名)が望んでいる。順に、「企業力」では72%(48名)、「地域力」は61%(41名)が望んでいることがわかった。

このことからそうした力を付ける大分を創る人材を育成するカリキュラムが求められていることがわかる。

4) -②学部別に見た関係

図20と図21は県内就職希望有と県内就職希望無による「大学の学び」で付けた力(複数回答)を示したものである。

図20の県内就職希望有においては、教育学部では「汎用力」が50.0%と他の学部比べて高いことと、工学部では「企業力」が50.0%と他の学部比べて高くなっているという特色が見られる。経済学部、福祉健康科学部においては、3つの「大学の学びで付けた力」がほぼ1/3の割合となっている。

このことは、教育学部及び工学部の特徴が伺え、学びのカリキュラムの工夫が求められることに繋がると考えられる。

図18

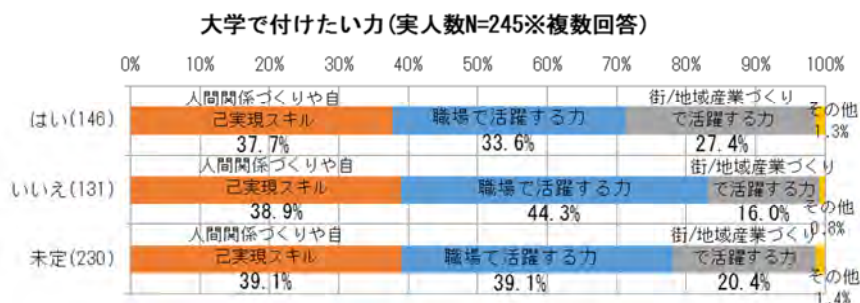


図19

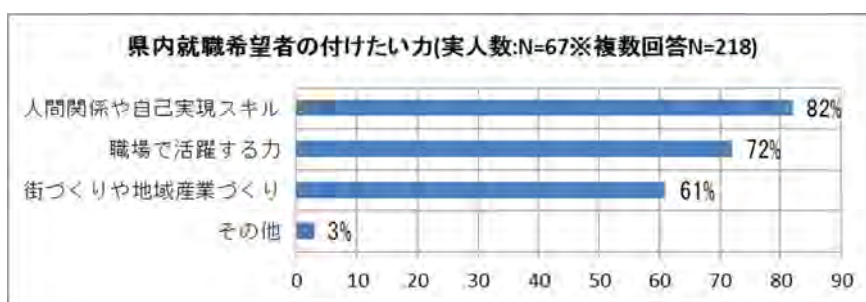


図20

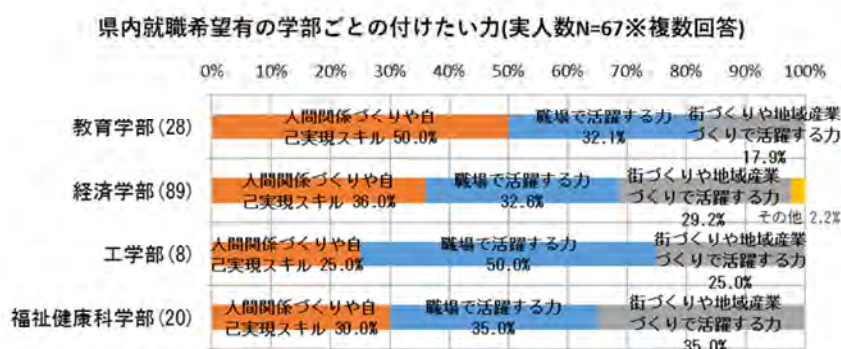
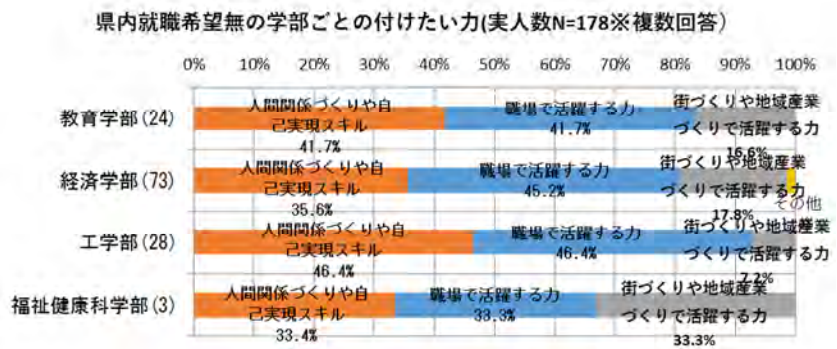


図 2 1 は県内就職希望無（未定を含む）を学部別に示したものである。

大分県内就職希望有と比較して「地域力」が少ないという傾向が見られる。また、大分県内就職希望有で少なかった工学部の「汎用力」が46.4%とほぼ2倍になっており、他の学部比べて多いという特徴もある。その他の傾向は大分県内就職希望の有と無及び未定との傾向の違いは見られない。

図 2 1



7. キックオフに参加しての効果

キックオフの目的は、COC+事業における学生が学ぶ大分を創る科目の主旨とその履修方法を周知することである。しかし、その前提としての、大分県内就職希望の有無や、大学における付きたい力の意識等も調査して前項で分析した。ここではキックオフの効果について分析することとする。

(1) 参加者全体の「大学での学びのイメージ化」

図 2 2 はキックオフを通して、大分を創る人材としての大学での学びのイメージ化について示したものである。

「とてもできた」と「できた」を合わせると83.7%であり、キックオフの当初の目的は達成できたと考える。

図 2 3 は学年別に示したものである。1年生は約90%が「イメージ化できた」と回答している。参加者数が多い1年生と2年生を比較すると、2年生では1年生に比べてイメージ化できたという回答が約20%少なくなっている。1年生が高い割合であったことは、各学部における入学ガイダンスの事前説明の効果であると考えられる。このことから、今後は学部の入学ガイダンスと連動したキックオフを実施することが、学生への周知として重要であることがわかった。

図 2 2

大学での学びのイメージ化(N=257)

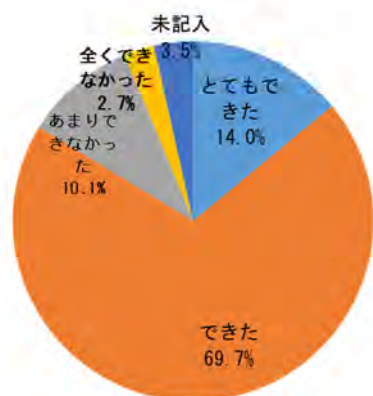
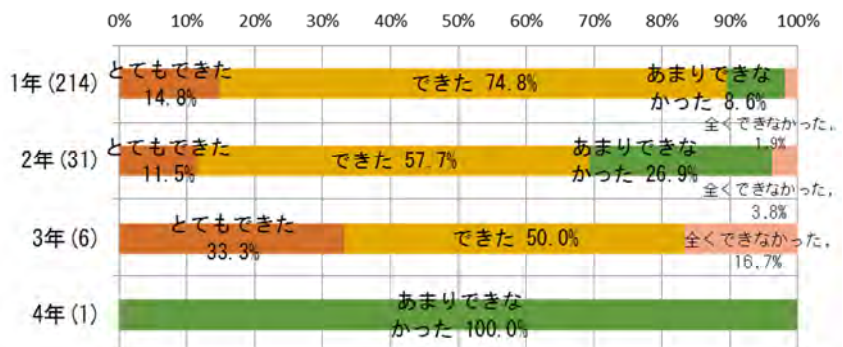


図 2 3

学年別のイメージ化の割合(N=252)



(2) 1年生・2年生の「大学での学びのイメージ化」

ここでは参加者数が多い1年生と2年生における、大分を創る人材として大学での学びのイメージ化に関して、他の項目との関係を分析することとする。

1) 学部別の「大学での学びのイメージ化」

図24は、大学での学びのイメージ化を学部別に示したものである。

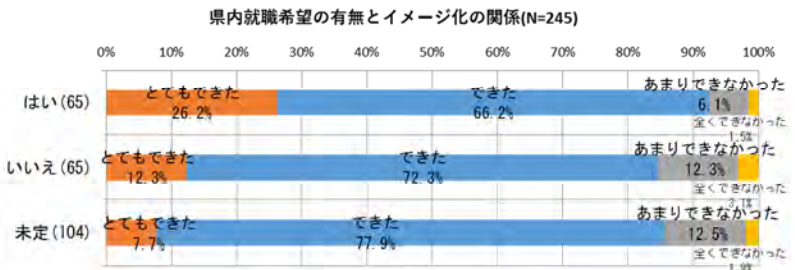
経済学部では約90%が「大学の学びのイメージ化ができた」と回答しており、他の学部比べて多くなっている。教育学部は「とてもできた」が19.8%と最も多いが、「イメージ化できた」と回答した割合は78.0%ともっとも少なくなっている。このことは教育学部生にとっては、「教員が大分を創る」という発想ができていないことがうかがえる。



2) 県内就職希望の有無と「大学での学びのイメージ化」

図25は県内就職希望有(65名)と希望無(65名)、及び「未定」(104名)別にイメージ化の割合を示したものである。

県内就職希望者は「とてもできた」(26.2%)と「できた」(66.2%)を合わせると92.4%の学生がイメージ化できたと回答しており、県内就職希望無と未定に比べて、大分を創る大学での学びのイメージ化に有効であったことがわかる。また、



県内就職希望無、及び「未定」の学生においても、およそ85%が大分を創る人材の育成に関する「大学での学びのイメージ化ができた」と回答している。

このことから今回のキックオフが、学生の大学における大分を創る人材に関するイメージ化にとって有効であったと判断できる。

3) 県内就職希望の有無と学部別の「大学での学びのイメージ化」

図26は学部別の県内就職希望有のイメージ化の割合を示したものであり、図27は学部別の県内就職希望無のイメージ化の割合を示したものである。

各学部とも県内就職希望有の学生方が「とてもできた」が25%前後であり、この2つの図を比較しても県内就職希望者の方がより大学での学びのイメージ化ができたことがわかる。

図 2 6

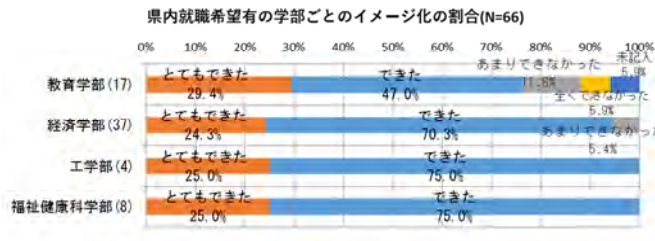
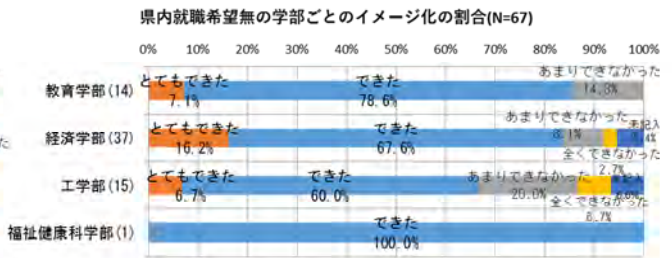


図 2 7



8. 相関関係からの分析 (パースンの相関係数より)

本アンケートの各項目 (巻末資料参照) の相関に関するデータから有意な相関が推測できる項目について分析する。ただし順序制が前提になっていない項目 (学部・出身地・性別) に関しては相関関係を判断できない。その他、相関係数による相関関係の有無の不明な項目に関しては、これまでの図を参考にして最後に考察する。

表 1 は縦の各項目と横の基礎的な項目の相関係数を示したものである。 **表 1**

無視できる確率が.05 以下を有意な相関があると考えられ、表 1 から、有意な相関関係が推測できる項目を縦系列で見ることとする。

学年との有意な相関が推測できる項目は「興味ある授業型式」(グループワーク・職場体験)と「大学での学びのイメージ化」である。「県内就職希望の有無」は、「地域力」「企業等による講義」「大学での学びのイメージ化」である。大学での学びのイメージ化は前述を除いて、「汎用力」と「企業力」との有意な相関が考えられる。

	学年	性別	大分県就職希望	「大学での学び」をイメージできたか?
学年	-	-	-	.003
性別	-	-	.004	-
大分県就職希望	-	.004	-	.025
どんな力を身に付けたいですか?	-	-	-	.015
人間関係など	-	-	-	.003
企業で活躍	-	-	-	-
街づくりや地域産業	-	-	.001	-
どんな授業形式に興味がありますか?	-	-	-	-
講義型(教員)	-	-	-	.041
講義型(企業)	-	-	.041	.009
グループワーク	.045	-	-	-
職場体験	.017	.018	-	-
他大学と一緒に	-	-	-	-
「大学での学び」をイメージできたか?	.003	-	.025	-

表 2 は各項目と「どんな力を身に付けたいか」との

表 2

有意な相関が推測できる相関係数を示している。

「汎用力」は、「講義型の授業」「他の大学生との学び」「大学での学びのイメージ化」との有意な相関が推測できる。「企業力」は、「企業人の講義」「職場体験」「大学での学びのイメージ化」との有意な相関、「地域力」では、「県内就職希望の有無」と教員による講義以外の授業型式に興味があるという有意な相関を示している。

	どんな力を身に付けたいですか?		
	人間関係など	企業で活躍	街づくりや地域産業
学年	-	-	-
性別	-	-	-
大分県就職希望	-	-	.001
どんな力を身に付けたいですか?	-	-	-
人間関係など	-	-	-
企業で活躍	-	-	-
街づくりや地域産業	-	-	-
どんな授業形式に興味がありますか?	-	-	-
講義型(教員)	.010	-	-
講義型(企業)	.000	.000	.000
グループワーク	-	-	.026
職場体験	-	.008	.002
他大学と一緒に	.010	-	-
「大学での学び」をイメージできたか?	.015	.003	-

表3は各項目と「どんな授業形式に興味があるか」との

表3

有意な相関が推測できる相関係数を示している。「教員による講義」は、「グループワーク」「職場体験」と有意な相関（負）が見られる。「グループワーク」は、「教員による講義」との負の相関、「職場体験」と「他の大学生との学び」には正の有意な相関が推測できる。「職場体験」は、「他の大学生との学び」と有意な相関が推測できる。

		どんな授業形式に興味がありますか？				
		講義型(教員)	講義型(企業)	グループワーク	職場体験	他大学と一緒に
	学年	-	-	.045	.017	-
	性別	-	-	-	.018	-
	大分県就職希望	-	.041	-	-	-
どんな力を身に付けたいですか？	人間関係など	.010	.000	-	-	.010
	企業で活躍	-	.000	-	.008	-
	街づくりや地域産業	-	.000	.026	.002	-
どんな授業形式に興味がありますか？	講義型(教員)	-	-	.000	.000	-
	講義型(企業)	-	-	-	-	-
	グループワーク	.000	-	-	.000	.000
	職場体験	.000	-	.000	-	.049
	他大学と一緒に	-	-	.000	.049	-
	「大学での学び」をイメージできたか？	-	.009	-	-	-

9. 大分を創る人材の育成の観点からの大分大学での取組に関する考察

本考察は、COC+事業の対象となる1年生を中心として、「大分を創る人材を育成する」という観点から考察する。但し、冒頭で述べたように、キックオフシンポジウムに参加した1年生が22.4%と少ないこと、及び、参加者は「大分を創る人材を育成する」ということに関心があった学生であることが推測できる。よって、これまでの数字の分析を単純に大分大学生の傾向であるとは言い切れないという前提で考察することとする。

(1) 大分大学における「大分を創る人材」に関する学びについて

これまでの分析を基にして、大分を創る人材を育成するための学びについて以下の4点について考察する。

- ① 1年生・2年生の大分県内就職希望者は27.6%と少なく、県内への就職希望をしていない学生も28.0%であり、未定が43.6%と半数近い。大分県内の就職希望の有無を学部ごとに見ると、工学部及び経済学部の「未定」は工学部が64.9%、経済学部が43.8%となっていることから、就職希望地未定の学生の学びが県内就職率向上へのカギとなることが推測できる。入学当初から大分県内就職希望が無い学生や未定の学生への、大分の魅力を伝える教育プログラムの開発も必要であると考えられる。
- ② 1年生・2年生の大分県内の就職希望の有無を学年ごとに見ると、2年生のデータ数が31と少ないため2年生全体の傾向を示しているかどうかは判断できないが、入学当初は「未定」(46.7%)が半数近くであるが2年生になると「未定」が減少し県内就職希望が38.7%と多くなっている。このことから、初年次教育からの大分を創る人材を育成するための教育プログラム必要であると考えられる。
- ③ 興味ある授業形式について、1年生では、2年生と比較して「グループワーク」(22.4%)、「職場や地域での体験」(27.1%)が多くなっている。2年生のデータ数が54と少ないために単純に比較はできないが、学年が上がるにしたがって求める授業形式が変わるのか、高等学校が本格的に実施している職場体験等のアクティブ・ラーニング等の授業形式が浸透して、大学においても求めているのかの調査が必要である。

④1年生・2年生の大分県出身者は61.6%が県内就職を希望しているのに対し、大分県外出身者は4.0%しかない。また、「未定」は大分県出身者では31.3%、大分県外出身者では53.7%と高い割合を示している。

以上の4点から、大分を中心として、地域で活躍する人材を育成するという目的を達成するためには、大分県出身者の入学促進と、就職希望先が未定の学生への大分を創る人材を育成する学びの提供という2つの取組の重要性が見える。さらに、学生時代の早期から、就職先として考えられる職場体験と雇用先の拡大が重要であるということが見えてくる。

(2) キックオフシンポジウムの効果について

これまでの分析から抜粋して、以下の点について考察する。

- ①1年生は約90%が「イメージ化できた」と回答している。参加者数が多い1年生と2年生を比較すると、2年生では1年生に比べてイメージ化できたという回答が約20%少なくなっている。1年生が高い割合であったことは、各学部における入学ガイダンスの事前説明の効果であると考えられ、今後も、全学部において入学ガイダンスでの説明の必要性がわかる。
- ②1年生・2年生の県内就職希望者は、大学での学びのイメージ化が「とてもできた」(26.2%)と「できた」(66.2%)を合わせると92.4%の学生がイメージ化できたと回答しており、さらに、県内就職希望無、及び「未定」の学生においても、およそ85%が大分を創る人材の育成に関する「大学での学びのイメージ化ができた」と回答していることから、今後も、全入学生を対象として実施することを検討する必要があるであろう。
- ③1年生・2年生の学部別の県内就職希望の有無による「大学での学びのイメージ化」の割合から見て、県内就職希望有の学生の方が「とてもできた」が25%前後であり、県内就職希望無に比べて10%ほど多く、県内就職希望者の方が、より「大学での学びのイメージ化ができた」ことから、「県内就職希望有の学生」の学生の入学の促進や、大分県への魅力を早期に体感させて「県内に就職したい」という魅力を味わわせるプログラムが必要ではないかと考える。

(3) 今後の取組について

前述したように、今回のアンケート対象者はキックオフに参加した「大分に関心を持っている学生」を中心としたものであるが、一定の傾向を整理し、把握することができた。「大分を創る人材を育成する」という観点からの、大分大学のエビデンスを持つためには、入学時と経年後の、学年全員、又は不特定多数の学部別(学部の50%程度)の共通した視点からの調査が必要である。そうした調査が、本学の教育プログラム充実と評価基準の策定、学生への学びの質の保証に繋がっていくと考えられる。